

稻積才才ヤチ古墳群

— 第1次調査報告書 —

2007年3月

富山大学人文学部考古学研究室

稻積才才ヤチ古墳群

— 第1次調査報告書 —

2007年3月

富山大学人文学部考古学研究室

目 次

第1章 調査の概要

1 調査に至る経緯	黒崎 直	1
2 調査組織と調査の目的・経過	下鴎明日香・高橋浩二	2

第2章 稲積オオヤチ古墳群の位置と立地	小松彩乃	4
---------------------	------	---

第3章 稲積オオヤチ古墳群の構成と古墳の特徴	松岡治奈	6
------------------------	------	---

第4章 測量調査の成果

1 測量調査の方法	山崎 翔	8
-----------	------	---

2 測量調査の成果		
-----------	--	--

A1号墳	竹中庸介	8
------	------	---

A2a号墳	赤座裕子	10
-------	------	----

A2b号墳	小川絵理香	11
-------	-------	----

A13号墳	吉田有里	12
-------	------	----

A14号墳	吉田有里	14
-------	------	----

A3号墳	北村志織	14
------	------	----

A4号墳	柳堀哲彦	14
------	------	----

A15号墳	皆川恒子	16
-------	------	----

第5章 A1号墳の墳丘形態の復元	高橋彰則	17
------------------	------	----

第6章 まとめ	高橋浩二	22
---------	------	----

例 言

- 1 本書は、富山大学人文学部考古学研究室が平成18（2006）年度に実施した、富山县水見市稲積地内に所在する稲積オオヤチ古墳群の第1次調査の成果報告である。
- 2 測量調査は、水見市教育委員会の指導と協力を得て、富山大学人文学部考古学研究室の構成員が実施した。
- 3 製図等は、4で記す学生を中心となり、調査参加者全員が協力して行った。写真撮影は高橋浩二が行った。
- 4 本文の執筆及び製図、写真図版作成は、黒崎 直（富山大学人文学部教授）、高橋彰則（富山大学人文学部助教授）、小林高太（富山大学大学院人文科学系研究科学生）、高橋浩二（富山大学人文学部研究生）、赤座裕子、小川絵理香、北村志織、小松彩乃、下鴎明日香、竹中庸介、柳堀哲彦、松岡治奈、皆川恒子、山崎 翔、吉田有里（以上、富山大学人文学部考古学研究室学生）が担当した。
- 5 本書の編集は、高橋浩二が担当した。
- 6 調査図面等は、現在、富山大学人文学部考古学研究室で保管している。
- 7 本書の作成にあたって、西井龍儀氏（富山考古学会副会長）をはじめとする方々から御教示並びに御協力を得た。記して感謝申し上げたい。
- 8 本書は、平成18年度富山大学人文学部倾斜配分経費（フィールドワーク・実験系補完経費）の活動成果を含むものである。



稻積才オヤチ古墳群 遠景



A1号墳 後円部南西側（南西から）

第1章 調査の概要

1 調査に至る経緯

富山県の北西部に位置する氷見市は、能登半島が作りだした豊かな漁場・富山湾を間近にのぞむ漁港をもち、かつ越中と能登をむすぶ海・陸路の要衝でもある。かのような環境は、日本列島が形成された原始・古代以来、不变である。この自然の地形を最大限に利用し、越中の人々は古くから隣り合う加賀や能登、越後などの人々と緊密かつ頻繁に交流してきたことは間違いない。

そんな歴史的な事実を、われわれに再確認させたのが1998年10月の「柳田布尾山古墳」の発見である。日本海側では最大級といわれる全長107mの前方後方墳の氷見地域における発見は、越中の古墳文化が陸路である「北陸道」に沿い「俱利伽羅峠」を越えてもたらされたであろうという「常識」に強く再検討を促すものであった。そしてなにより重要なのは、その交流が陸路か海路かという二者択一的な理解ではなく、より多面的な交流ルートの存在を暗示させることであった。

こうして氷見地域の古墳文化の見直しが始まると、引き続いて「阿尾島田古墳群」が発見（1999年11月）され、その群中に「前方後円墳」の可能性があるA1号墳の存在が注目を集めた。そこで富山大学考古学研究室では、氷見市教育委員会の協力などを得ながらA1号墳の発掘調査に取り組み、以下の諸点を明らかにした。すなわち全長約70mの前方後円墳であること、後円部中央に埋葬主体があること、そしてそこに全長7m余の木棺があり、内部には槍や刀、ヤスなどの鉄製品やガラス玉が副葬されていたことなどである。ただし古墳の年代については、古墳時代前期であろうことは推測できるものの、「柳田布尾山古墳」との先後関係などを判定する決め手を欠くのも事実である。

そこで2004年度から新たに「日本海中部沿岸域における古墳出現過程の新研究」（代表黒崎直）を立ち上げ、氷見市域における前期古墳の調査研究に取り組むこととした。この研究は幸いにも、2004年から科学研究費補助金事業として採択され、初年度と次年度の2年にわたりA1号墳に隣接するA2号墳の発掘を行った。その結果、墳丘が方形であること、その中心部に長方形の墓壙が存在することなどを確認したものの、墓壙内には朱が散布されているにもかかわらず副葬品のたぐいは一切遺存しておらず、残念ながらここでも年代等の詳細を明らかにすることができなかった。

そこで2006年度は、氷見地域における古墳研究の新たな展開をめざし、阿尾島田古墳の西方に位置する稲積オオヤチ古墳群を測量調査しその概要を把握することとした。本古墳群も1999年に発見されたもので、その中心をなすA1号墳は、県下でも最大級の帆立貝形古墳（約47m）の一つとして注目される。阿尾島田古墳群と稲積オオヤチ古墳群、この隣接する2つの古墳群をセットで把握することにより、氷見地域の古墳時代がより豊かに理解できるであろうと考えたからである。

今回、測量調査を行った稲積オオヤチ古墳群の概要は、以下に報告するとおりであるが、一方では本古墳群の一部が、建設の進む「能越自動車道」の路線内に含まれており、2007年度以降に発掘調査が実施されるという。開発事業に伴い実施されるのは残念であるが、今後に公表される調査成果とも合わせ、本古墳群の性格がより深く解明されることを念願する次第である。

（黒崎 直）

2 調査組織と調査の目的・経過

稲積オオヤチ古墳群は、1999年11月に西井龍儀氏によって発見され、同年12月から2000年5月にかけて水見市史編さん委員会と富山考古学会を中心とするメンバーによって、一部の古墳の測量が実施された。その成果はすでに『水見市史』7資料編5考古（水見市史編さん委員会2002）に公表されており、これについては第3章で後述することにしたい。今回の第1次調査は、従来の成果を基礎としつつ、以下のようないくつかの目的で、あらためて測量を行うものである。

調査の目的としては、次の5点が挙げられる。第1に、古墳墳頂部を原点とする相対高によって行われた従来の測量図を、絶対高によるものにあらためることである。

第2に、前方後円（方）墳の存在や古墳群の構成を確認することである。なぜなら、富山県では、前方後円（方）墳の確認例はまだ少なく、また帆立貝形前方後円墳の確実な例もほとんど知られていない。そのため、これらの古墳の存在を明らかにすることは重要な意義をもつ。それとともに、墳形の違いや基數を明確にすることは、古墳群の存続期間を捉えるのに有効だからである。

第3に、全長約47.5mの帆立貝形前方後円墳とされたA1号墳について、その規模を再度確認することである。富山県内では、40m以上の規模をもつ古墳はそれほど多くなく、そのため従来の成果通りであれば、A1号墳は県内最大の帆立貝形前方後円墳ということになり、地域を統括する首長墳として位置付けることが可能となる。

第4に、埴輪や土器などの遺物の探索である。

そして、第5に、これらをふまえて稲積オオヤチ古墳群を、富山県における古墳の編年上に位置付けることである。

第1次調査は、次頁のような組織を編成して実施した。8月18日に測量原点を設定するとともに、古墳群内の草木の伐採を始めた。また、8月20日に機材を搬入し、各古墳の測量を開始した。測量は、適宜杭打ちを行いながら実施し、並行して古墳の写真撮影を行った。そして、8月25日に調査が終了した。

調査の対象とする古墳および範囲は、A1号墳と、そこから南へ伸びる尾根上に立地するA2号墳からA4号墳までの範囲、さらにA4号墳から南西へ伸びる尾根上である。



写真1　測量調査参加者

測量の結果、前方後円墳と考えられていたA2号墳を、2基の方墳が隣接するもの（A2a号墳・A2b号墳）として現時点では捉えることにした。また、A2号墳とA3号墳の間には、2箇所にわずかな高まりが存在し、本書ではそれを新規の古墳（A13号墳・A14号墳）として報告することとした。さらに、A4号墳から南西へ派生する尾根上には、新たにA15号墳を発見した。

なお、A2a号墳・A2b号墳・A13号墳・A14号墳についてはさらなる調査が必要であり、今後の調査によってはA15号墳も含めて、名称に変更が生じる可能性があることをおことわりしておきたい。

発掘にあたっては、水見市および水見市教育委員会、水見市立博物館、稲積地区的皆様、また宿舎を提供してくださった四枚田正夫氏とご家族の方々には多大な御助力を戴いた。記して厚く御礼申し上げる。

（下嶋明日香・高橋浩二）

稲積オオヤチ古墳群第1次調査組織

調査主体：富山大学人文学部歴史文化コース（考古学）

調査責任者：黒崎 直（富山大学人文学部教授）

調査担当者：高橋浩二（富山大学人文学部助教授）

調査参加者：間野 速、小林高太（以上、富山大学大学院人文科学研究科学生）

高橋彰則（富山大学人文学部研究生）

東 良明、伊藤剛士、岡島怜子、久慈美咲、黒木 苗、小林智海、真田泰光、徳井恵子、福西磨衣、村上しおり、川田聖実、赤座裕子、小川繪理香、北村志織、小松彩乃、下嶋明日香、竹中庸介、柄堀哲彦、松岡治奈、皆川恒子、山崎 翔、吉田有里、坂上菜美子、坂田裕之、佐藤雄太、高畑郁美、細丸善弘、増永佑介、松木綾子、村上 直、横幕 真

（以上、富山大学人文学部考古学研究室学生）

調査協力：水見市教育委員会



写真2～5 伐採および杭設定、測量調査風景

第2章 稲積オオヤチ古墳群の位置と立地

水見市域は、富山県の北西部に位置する。広大な富山平野とは二上山塊によって切り離された場所に位置し、むしろ「能登半島の付根部」と表現した方が適当ではないかと思われる地理的環境にある。地形的に見ても、市域の北と西は標高200～500mの丘陵によって、また東は富山湾によって区され、独立した小地域圏を成している。

小河川沿いと海岸沿いには比較的小規模な平野が形成される。いまこの平野を仮に「水見平野」と表現する。平野内には北から、阿尾川、余川川、上庄川、仏生寺川の4つの代表的な河川が存在する。なお、かつて水見平野内には、仏生寺川と上庄川流域を中心に潟湖（ラグーン）が存在したと推定され、現在も十二町潟がその名残を留める。また、余川川沿いにも潟湖の存在が推定されている。

稲積オオヤチ古墳群は、この水見平野の中では最も北側の阿尾川と余川川とに挟まれた丘陵上に位置している。標高は25～60mで、ここからは富山湾を一望することができる。古墳群の北側からは能登半島へと丘陵地帯が続いているが、逆に能登半島側から見れば、この付近で急に平野は開けていき、海上、陸上ともに越中と能登とを結ぶ交通の要所ともいえるような場所に古墳は築かれている。

続いて、水見平野の古墳について、発掘調査が実施されたものを中心に概観してみよう。まず、前期古墳では、隣接する丘陵上に阿尾島田A1号墳（約70mの前方後円墳）が存在する。ここからは多数の鉄製品と玉類が出土している。仏生寺川流域には、前方後方墳としては日本海側最大の柳田布尾山古墳（107.5m）がある。さらに、ここから約3.8km南東の海岸沿いには、石釧5点を出土した桜谷2号墳（約50mの帆立貝形前方後円墳）をはじめとする桜谷古墳群が築かれている。その他、上庄川流域に、中村天場山古墳（33.5mの前方後円墳）などが存在する。

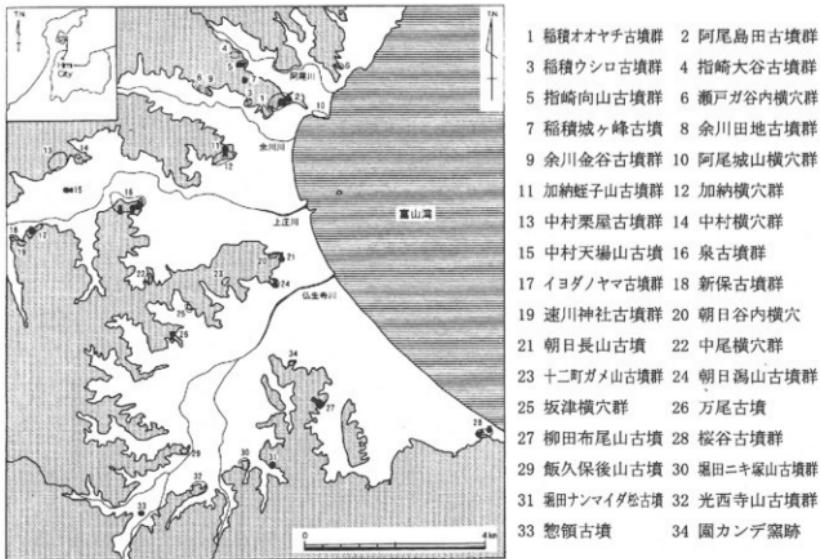
中期には、上庄川流域に、横矧板紙留短甲1と鉄刀2、鉄鑿1、鉄鎌21などが出土したイヨダノヤマ3号墳（径20.5mの円墳）が築かれる。その他、同流域には、泉1号墳（約43mの円墳）や上田1号墳（約44mの円墳）などが存在する。

後期には、仏生寺川下流域に、朝日長山古墳（推定43mの前方後円墳）が築かれる。ここからは鉄刀5、鉄劍1、鉄矛1、鉄鎌37以上、金銅張り胡蝶金具3、刀子2、馬具（金銅張り杏葉2、鞍金具1）、金銅製冠帽片、管玉2、ガラス小玉6などが出土し、後期前葉の築造と判断される。後期において、40mを越える前方後円墳は、他に小矢部市若宮古墳（墳長50mの前方後円墳）がある。富山において埴輪をもつものは、朝日長山と若宮の2つだけであり、両者は有力首長の古墳と推測される。

これ以降は、横穴墓の築造が相次ぎ、水見市域全体で約131基を数える。横穴墓は、能登半島東部の七尾市にかけて多数確認されており、列島でも有数の集中地帯となっている。

このように、水見市域には前期から後期を通じて、比較的大型の古墳が存在し、また多数の古墳が築かれており、小矢部市域と並んで富山における古墳文化の摇籃・発展の地の一つであったと言うことができよう。水見平野内に存在したであろう潟湖や富山湾を介しての海上交通及び漁労活動などの拠点的役割、そして小河川や峠道を通じての能登半島との陸上交通の要衝としての役割とが、有力首長墳築造の社会的基盤となったことが推測される。

（小松彩乃）



第1図 稲積オオヤチ古墳群の位置と周辺の古墳・主要遺跡



第2図 稲積オオヤチ古墳群の立地と構成

第3章 稲積オオヤチ古墳群の構成と古墳の特徴

古墳群の構成と個々の古墳については、これまでに次のようなことが明らかにされている（第2図）。

まず、古墳群はA支群とB支群に分けられる。A支群の古墳は、南東側へ伸張する丘陵尾根上に存在する。3つの尾根が集まる最高所（標高57.8m）に築かれたのが、帆立貝形前方後円墳と推定されるA1号墳である。そして、ここから南へ下降する中央の尾根には標高約28mの尾根先端部までに、前方後円墳と推定されるものの1基（A2号墳）、前方後方墳1基（A7号墳）、方墳6基（A3～A6、A8、A12号墳）が確認されている。南東側尾根には、A9～A11号墳までの方墳3基が存在する。なお、B支群の古墳は、南西側の尾根上に存在し、ここには標高約54mに位置する長さ約17mの長方墳であるB1号墳をはじめ、径14～22mの円墳4基が築かれる。このように、A・B両支群を合計して約17基の古墳が見つかっている。それでは次に、A支群の個々の古墳について見ていくことにしよう。

A1号墳は、約47.5mの帆立貝形前方後円墳と推定されている。主軸上の規模は、後円部約36m、前方部約11.5mとなる。前方部は幅約23mを測り、長さに比して幅広となる。また、後円部と前方部の高さは、それぞれ約6m、約1.5mを測る。後円部と前方部の比高差は約4.5mとなる。段築・葺石・埴輪は存在しないと考えられる。

A2号墳は、墳長約18mの前方後円墳と推定されているが、くびれ部は明確でなく、また後円部と前方部の比高差もほとんど認められない。

A3号墳は、尾根方向に直交する空堀状の溝で区画された長方形墳で、南北約18m、東西約12m、高さ約1.6mを測る。

A4号墳からA6号墳は、方形の平坦面が壇壇状に2段ずつ並び前方後方墳となるが、壇壇の標高は揃いである。よって、3基の方墳と考えられるが、他の平坦面についても小型の墳丘とみた場合は、さらに古墳数が増える可能性がある。

A7号墳は、墳長約23mの前方後方墳と推定される。後方部背後の尾根を切断することによって墳丘は築かれている。後方部は長さ約15m、幅約16m、高さ約3m、前方部は長さ約6m、幅約5mを測る。

A8号墳は、区画溝をもつ低平な方墳で、一辺約9m、高さ約1mを測る。

A11号墳とA12号墳は、A8号墳と類似した古墳とされ、いずれもA支群の古墳では低位置にある。

A2～A12号墳についても、段築・葺石・埴輪などは確認されていない。

土器や副葬品等はこれまで確認されていない。墳丘の形状からみると、A1号墳は帆立貝形前方後円墳であることから古墳中期以降の築造と考えられる。また、A7号墳は低平な前方部を備えることから、古墳前期以前のものと推定される。A支群の他の方墳についても、A7号墳と同様な時期が想定されている。

なお、今回の測量調査によって、A2号墳については2基の方墳が並んだものと考えることができた。そこで、それぞれをA2a号墳、A2b号墳と記述することにした。また、A3号墳までの間に、2基の方墳を確認し、それぞれをA13号墳、A14号墳とした。さらに、南西側の尾根上に、方墳を1基発見し、これをA15号墳とすることにした。
(松岡治奈)

参考文献

水見市史編さん委員会2002『水見市史』7資料編5考古、水見市



第3図 稲積オヤチ古墳群第1次調査地形測量図（縮尺1/800、小川製図）

第4章 測量調査の成果

1 測量調査の方法（第4図）

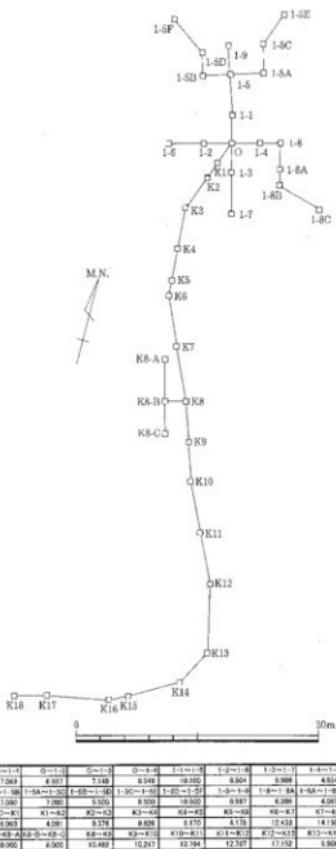
測量原点Oは、A1号墳の後円部中心に設定した。そして、そこから東へ1-4、1-8、1-8 A～C、西へ1-2、1-6、南へ1-3、1-7、北へ1-1、1-5、1-5A～F、1-9の各杭を設定した。

杭の設置場所は、1-5杭が前方部平坦面、1-5A杭が前方部平坦面東端付近、1-5B杭が前方部平坦面西端付近、1-5E杭が前方部北東側斜面、1-5F杭が前方部北西側尾根、1-6杭が後円部西側斜面、1-7杭が後円部南端付近、1-8B杭が後円部東側斜面、1-8C杭が造出と推定される部分にそれぞれある。

また、南西方向にK1～K3の杭を設け、K4～K18の杭を設ける際の基準とした。およそ、K8杭がA2a号墳頂部、K9杭がA2b号墳頂部付近、K10杭がA13号墳前方部、K12杭がA14号墳頂部付近、K13杭がA3号墳頂部付近、K14杭がA4号墳頂部平坦面付近、K17杭がA15号墳頂部平坦面にあたる。

なお、測量原点Oの標高は、水見市阿尾の一等水準点（点名9316、標高6.494m）から、光波測距機を用いて計測した。これらをもとにして、縮尺1/100、等高線25cm間隔により、平板測量図を作成した。

（山崎 翔）



第4図 稲積オヤチ古墳群調査区基準杭と配置図
(縮尺1/600、山崎製図)

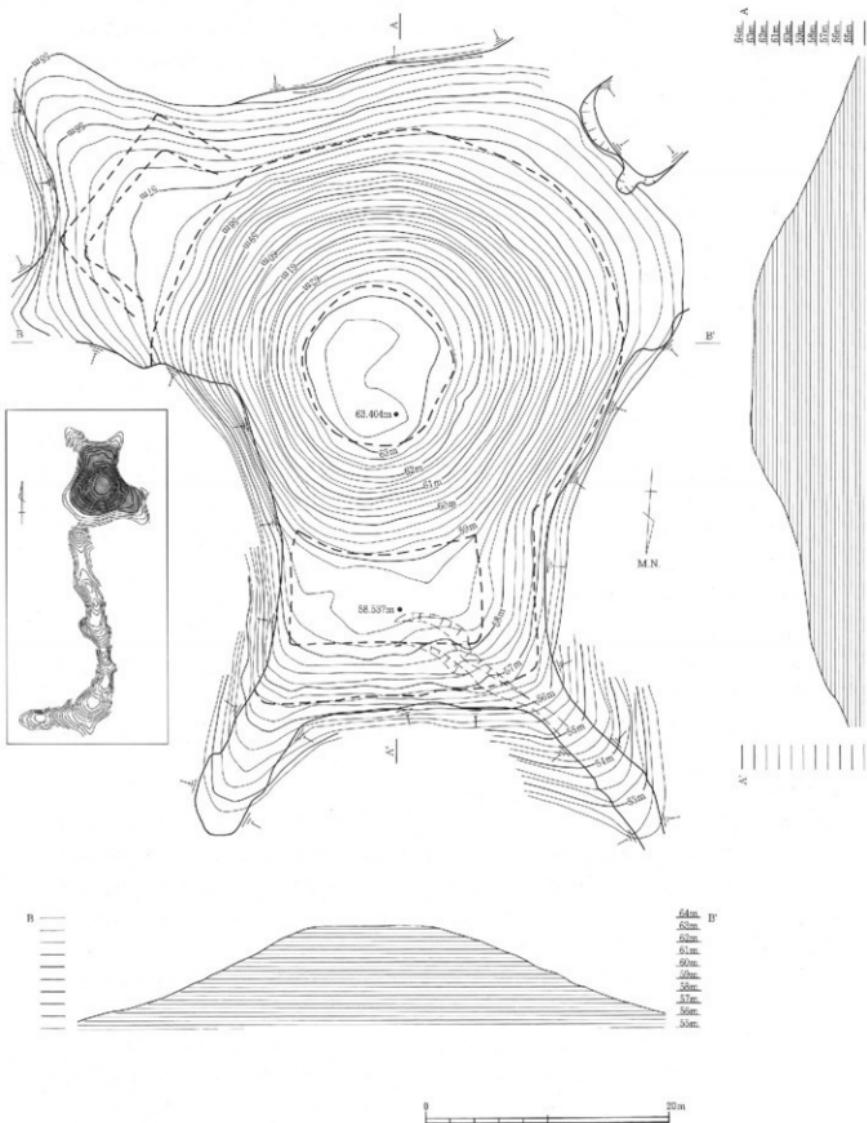
2 測量調査の成果

A1号墳（第5図）

本墳は、南北方向へ伸びる尾根、B支群が所在する北西方向へ伸びる尾根、A9号墳などがある存在する南東方向へ伸びる尾根、これら3つの尾根が集まる最高所（標高57.8m）に築造される。

測量の結果、南北に主軸をもつ、墳長約46.5mの帆立貝形前方後円墳ということが判明した。これは水見市史編さん委員会2002の成果と比べ約1m小さい規模である。後円部は径約36.0m、高さ約6.9m、前方部は長さ約10.5m、幅約23.0m、高さ約1.8m、後円部と前方部の比高差は約5.1mを測る。

後円部の墳裾は、南西側で明確であり、標高57.000m～57.250mの等高線の間に位置する。また、墳裾の外側には、幅2.0m程度の緩やかな傾斜面が認められる。後円部の南側と北西側は傾斜が急となっている。



第5図 A1号墳測量図（縮尺1/400、小松製図）

が、南西側における墳裾の標高を基準にすると、墳裾の把握が比較的容易である。すなわち、後円部の南側から北西側にかけての墳裾は、南側で56.750mの等高線上、北西側で56.500～56.750mの等高線の間にそれ位置する。後円部北側の墳裾は59.000～59.250mの等高線の間にあり、北側部分だけが約2.5m高くなっている。この等高線の相違は、後円部北側に前方部が存在することに起因する。

前方部裾部の標高は、西側で57.000mの等高線付近、北側で56.500～56.750mの等高線の間に位置する。東側は崩落のため確認できないが、ほぼ同一の等高線で巡るものと考えられる。

このように、墳裾は、後円部の西側から北側へかけて円形に巡らずに、北側部分が大きく前方部に張り出すことが明らかとなった。前方部は、後円部に匹敵する規模をもたず、約1/3の長さに留まり、また長さに比して幅広である。これらのことから、帆立貝形前方後円墳と判断した。古墳の東側が崩落していることを除けば、墳丘の遺存状況は全体的によいものと考えられる。

前方部墳頂の平坦面は、南北長約7.5m、東西幅約15.0mで、最高点の標高は58.537mを測る。後円部の墳頂平坦面は、径約13.0mで、最高点の標高は63.404mを測る。なお、後円部墳頂に見られる等高線の歪みは自然地形のわずかな凹凸によるものであり、この場所に盗掘の痕跡や、また土壘のような高まりは認められない。

後円部南側の墳裾の標高である56.750mの等高線を東側へ追跡していくと、後円部南東側において等高線が大きく張り出し、この部分の墳裾に接して、長さ約6.5m、幅約11.0mの平坦面が存在することが分かる。この平坦面を造出と考えると、造出側面の裾部は南西側で55.500～56.500m、北東側で55.750～56.750mの等高線の間にそれぞれ位置するものと推定される。しかしながら、造出前端部を区画する溝などは現状では確認することができず、この部分には尾根に沿う緩やかな傾斜面が見られるのみである。このように現状では、造出とするか否かについては明確な判断を行うことができない。造出でない場合でも、後円部南西側の墳裾外側に認められる緩傾斜面に比して、大きな平坦面を形成することから、古墳祭祀に伴う場であった可能性が考えられる。いずれにしても、この平坦面については今後検討する必要がある。

なお、段築や葺石の存在は確認されなかった。また埴輪や土器などの遺物も採集されていない。

(竹中庸介)

A2a号墳（第6図）

本墳は、A1号墳から南に約33m、標高約50mの尾根上に位置する。現況は、やや歪んだ長楕円形状の高まりとして観察され、墳丘裾部の傾斜変換点は不明瞭である。しかし、本来は緩やかな下り坂が続くべき場所に、古墳状の明らかな隆起が認められ、よって自然地形の一部ではなく、古墳であると判断した。古墳は、南北約10.8m、東西約8.0m、高さ約1.4mの長方形を呈する方墳である。墳頂最高点は51.214mを測る。墳頂平坦面は長楕円形の形状を呈する。

墳裾に伴う溝などの遺構は認められず、また傾斜変換点も明瞭ではない。とくに東側斜面は崖による崩落のため、当初の墳裾が残存していない可能性がある。一方、傾斜が比較的緩やかな西側においては、標高49.750mの等高線上に墳裾が位置するものと判断できる。南側は隣接するA2b号墳との境界が、また北側は後述するように平坦面との境界がやや曖昧となるが、それぞれ標高50.750mと、50.000mの等高線付近に墳裾が推定される。

墳丘の北側部分は、南北約7.5m、東西約6.5mの比較的幅の広い平坦面となる。ただし、北側には目立った起伏もなく、緩傾斜面が20m程続いており、自然地形との区別は曖昧なものである。

南側はA2b号墳と隣接しており、本墳とA2b号墳を合わせて前方後円（方）墳となる可能性が考えら

れる。しかしながら、2つの墳丘の外周を一貫して巡る墳裾は確認できない。A2a号墳とA2b号墳の主軸方向にはわずかな齟齬が存在する。また、くびれも明確ではない。後円部と前方部の比高差もほとんど認められない。以上のことから、前方後円墳ではなく、2つの方墳が並んで存在するものと判断した。

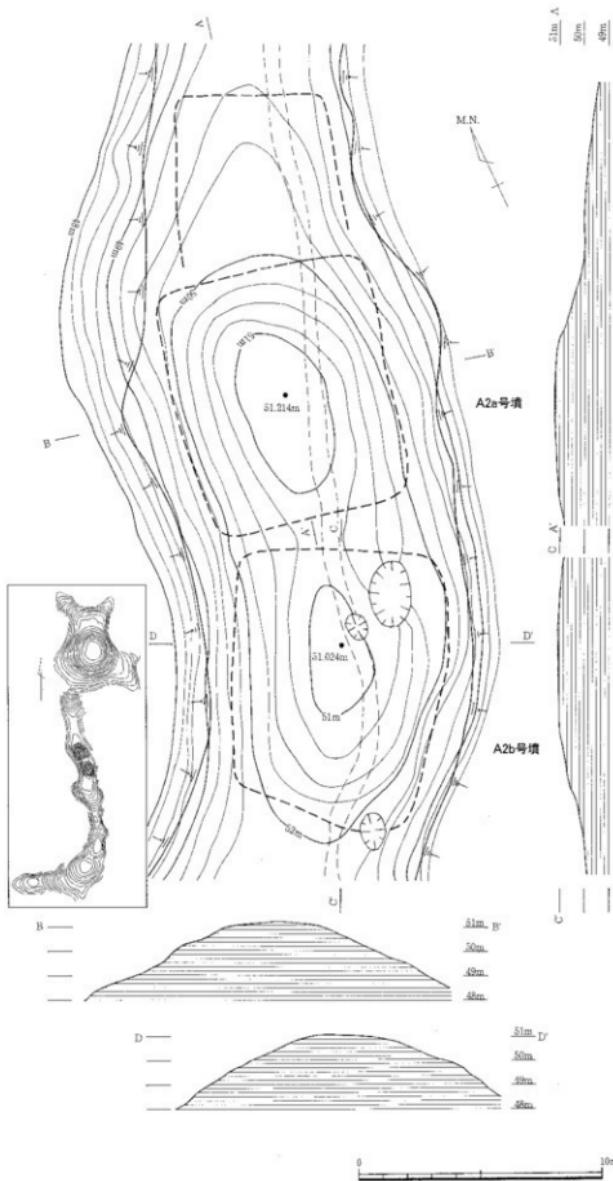
なお、段築や葺石の存在は確認されなかった。また埴輪や土器などの遺物も採集されていない。

(赤座裕子)

A2b号墳(第6図)

本墳は、A2a号墳と約2mの間隔をおいて築かれた、南北約11.0m、東西約7.0m、高さ約1.0mの長方形を呈する方墳である。墳頂最高点は51.024mを測る。墳頂平坦面は長楕円形の形状となる。

古墳東側は崖によって墳裾部の一部が消失しており、さらに北東側および南東側の墳裾と推定される部分も倒木痕などの搅乱によって不明瞭となる。また、西側部分についても、明確な墳裾は確認することができず、すでに墳裾は盛土とともに



第6図 A2a号墳・A2b号墳測量図(縮尺1/200、赤座製図)

流失した可能性が考えられる。

南側は、隣接するA13号墳との間が一段低くなつておき、標高50.000～50.250mの等高線の間に墳裾を推定することができる。

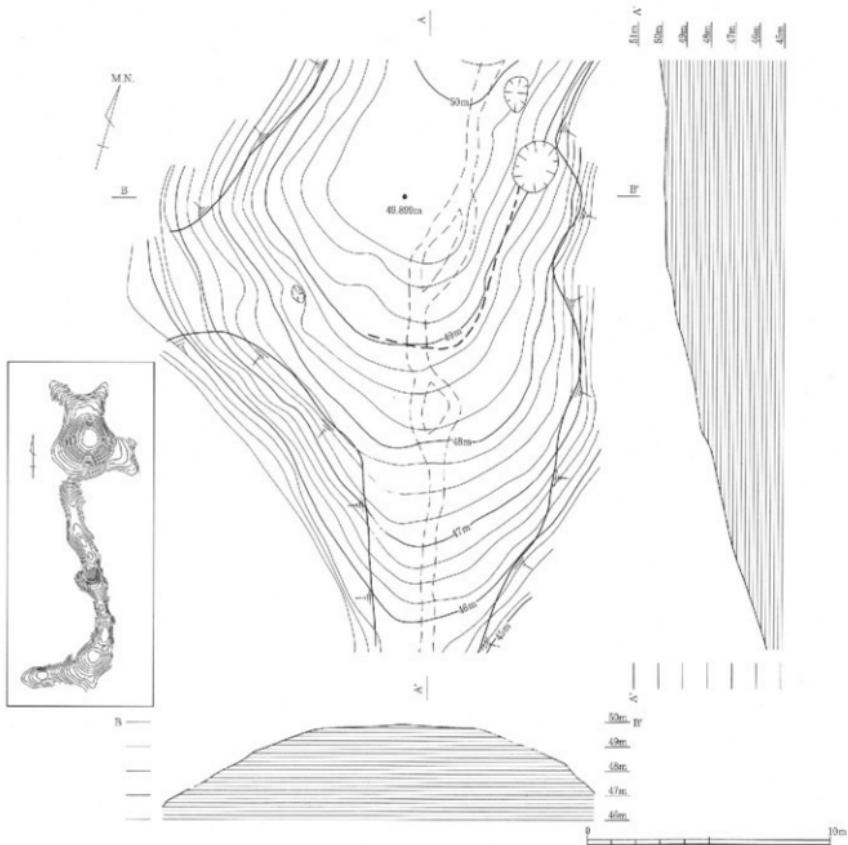
なお、段築や葺石の存在は確認されなかつた。また埴輪や土器などの遺物も採集されていない。

(小川絵理香)

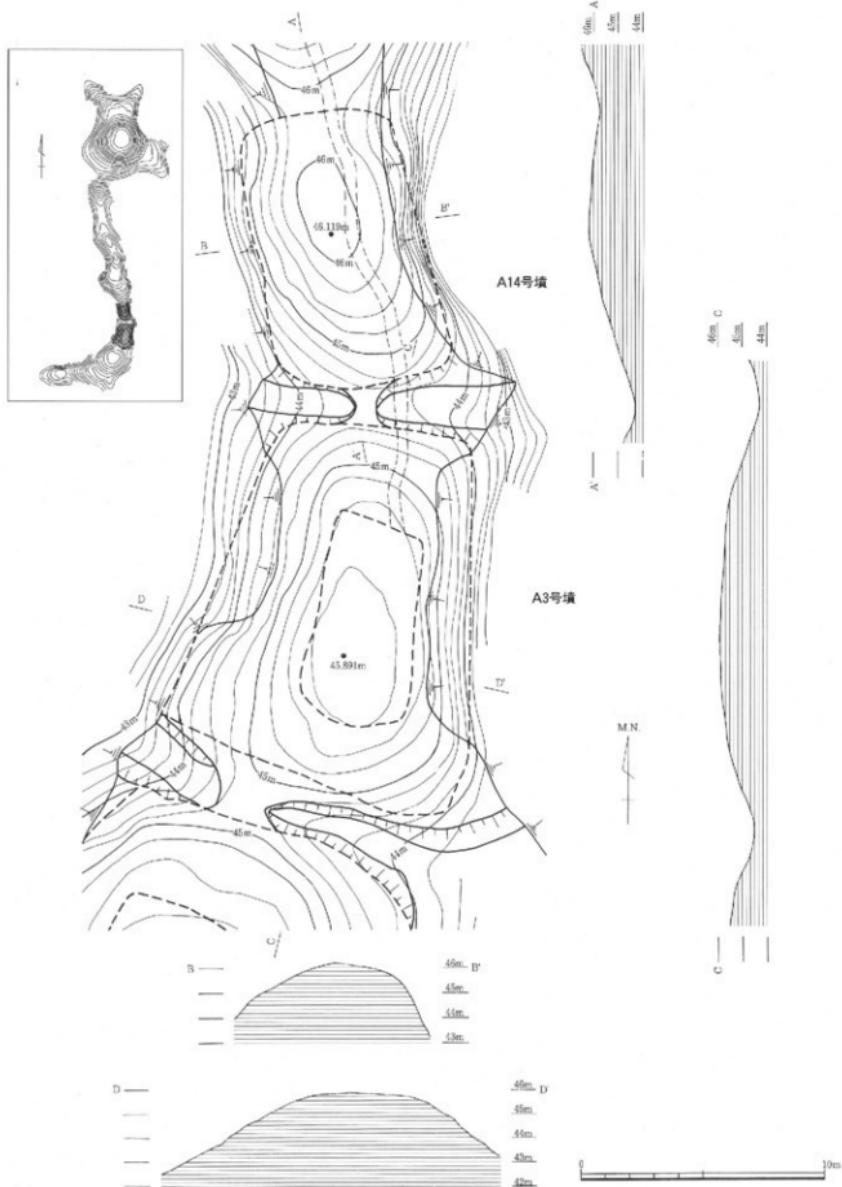
A13号墳（第7図）

本墳は、標高約50mの位置にある。南北約8.5m、東西約5.5m、高さ約1.1mの長方形を呈する方墳である。方墳と判断した根拠は、墳丘東側と南側の等高線が圓丸長方形状に巡るためである。また、墳頂部には南北約6.0m、東西約5.5mの方形状の平坦面が認められる。墳頂最高点は49.899mを測る。

墳裾は、東側で標高48.750～49.250m、南側で標高48.750～49.000mの等高線の間にそれぞれ位置する。



第7図 A13号墳測量図（縮尺1/200、吉田製図）



第8図 A14号墳・A3号墳測量図(縮尺1/200、北村製図)

西側と北側については、墳裾が明確でない。

古墳の東側は2.0mほどいくと崖面となる。また、南西側と北西側についても近接して崖面が存在する。西側へは幅の狭い小尾根が派生している。そして、南側は緩やかな傾斜面となっている。

なお、段築や葺石の存在は確認されなかった。また埴輪や土器などの遺物も採集されていない。

(吉田有里)

A14号墳（第8図）

本墳は、A13号墳から南へ約12mの、尾根の幅が急に狭まる所に位置する。標高は約45mである。現況は長楕円形状の高まりとして観察されるが、古墳は南北約11.5m、東西約7.0m、高さ約1.5mの長方形を呈する方墳と判断される。墳頂最高点は46.019mを測る。

墳裾は、南側で標高44.000～44.750m、北側で標高44.500～46.000mの等高線の間にそれぞれ位置する。東側と西側は崖面となり、墳裾の大部分がすでに消失したものと考えられる。そのため、東側と西側については墳裾の推定ラインを記している。

古墳の南側には、隣接するA3号墳の墳裾に伴うと考えられる溝が存在する。

なお、段築や葺石の存在は確認されなかった。また埴輪や土器などの遺物も採集されていない。

(吉田有里)

A3号墳（第8図）

本墳は、A14号墳から南へ約3m、尾根が西側へ屈曲しあじめる所に位置する。標高は約44mである。古墳は、南北約15.0m、東西約10.0m、高さ約1.1mの長方形を呈する方墳である。墳頂部には南北約8.0m、東西約4.0mの長方形を呈する平坦面が認められる。墳頂最高点は45.871mを測る。

墳丘北側のA14号墳との間、そして墳丘南側のA4号墳との間には、いずれも上面幅約2.5mを測る溝が存在し、古墳は尾根を横断するこれらの溝によって区画される。両溝とも、中央部が1.0～2.0mほどの幅で陸橋状に掘り残されている。墳丘の東側および西側は崖面となっており、溝が巡るかどうかは確認できなかった。

墳裾は、南側で43.750～45.250m、北側で43.750～44.500mの等高線の間にそれぞれ位置する。墳丘の東側と西側については、先述のとおり崖面となり、墳裾の大部分はすでに消失したものと考えられる。ただし、コーナー部付近は辛うじて崩落を免れており、それによって西側では43.750～44.000m、東側では44.000～44.250mの等高線の間に墳裾を推定することができる。

なお、段築や葺石の存在、埴輪や土器などの遺物は確認されていない。

(北村志穂)

A4号墳（第9図）

本墳は、A3号墳から南西に約3m、標高約45mの所に位置する。南北約17.5m、東西約15.0m、高さ約2.0mの長方形を呈する方墳である。墳丘の東側から南側にかけては等高線が弧を描いて巡っているが、A3号墳との間に存在する溝の平面形が直線をなすことから、方墳と判断した。墳頂平坦面は南北約6.0m、東西約6.0mである。墳頂最高点は45.792mを測る。

墳裾は、北側で44.000～44.250m、東側で43.000～44.250m、南側で42.750～43.000mの等高線の間にそれぞれ位置する。墳丘の西側は崖面となるが、コーナー部付近は辛うじて崩落を免れており、北東コーナー部では44.000m、北西コーナー部では43.000mの等高線上に墳裾が推定される。



第9図 A4号墳測量図（縮尺1/200、柵堀製図）

また、A4号墳から約8.0m離れた尾根下には、標高41.500～42.750mの間に等高線の歪みが認められ、ここに長軸約10.0m、短軸約3.0mの小さな平坦面が存在している。しかし、この平坦面とA4号墳の主軸とは方向が若干異なっており、両者の関係性は判然としない。

なお、段築や葺石の存在、埴輪や土器などの遺物は確認されていない。

(柵堀哲彦)

A15号墳（第10図）

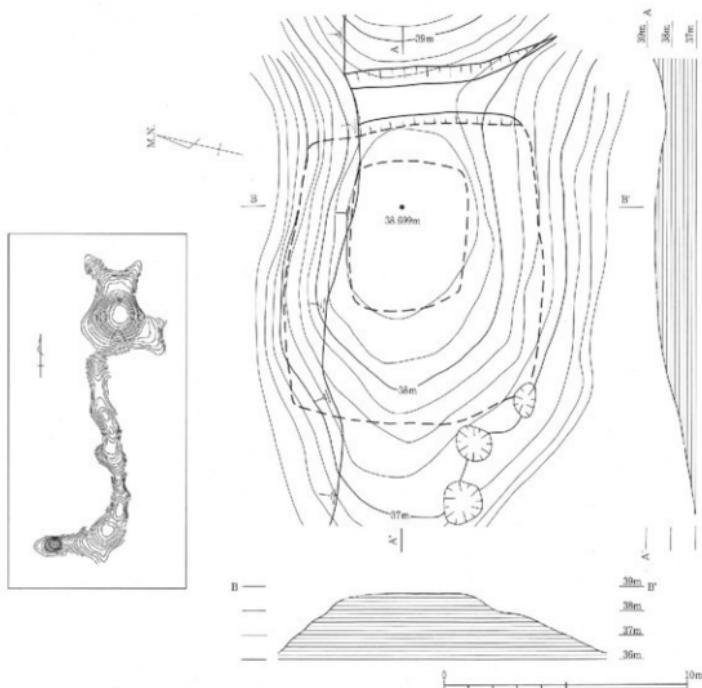
本墳は、A4号墳から西へ約20m、標高約37mの所に位置する。東西約12.0m、南北約10.5mで、長方形を呈する方墳である。墳丘の高さは、東側で約0.4m、南側で約1.5m、西側で約1.2mを測る。墳頂平坦面は東西約6m、南北約5mの隅丸方形形状を呈する。墳頂の最高点は標高38.699mを測る。

墳丘の東側には、A4号墳から続く尾根を横断する、上面幅約2.5m、現状での深さ約0.3mの溝が認められる。墳裾は、東側で38.500mの等高線上、南側で37.250～37.500m、西側で37.250～37.750mの等高線の間にそれぞれ位置する。北側は崖による崩落のため、明確な墳裾を確認できなかった。

墳裾付近の等高線は、東側と南側ではほぼ直線的となるが、西側については尾根に沿って約4m張り出していくことが分かる。しかし、この位置に突出部状の明確な高まりは認められず、そのため前方後方形とする判断するには至らなかった。

なお、段築や葺石の存在、埴輪や土器などの遺物は確認されていない。

（皆川恒子）

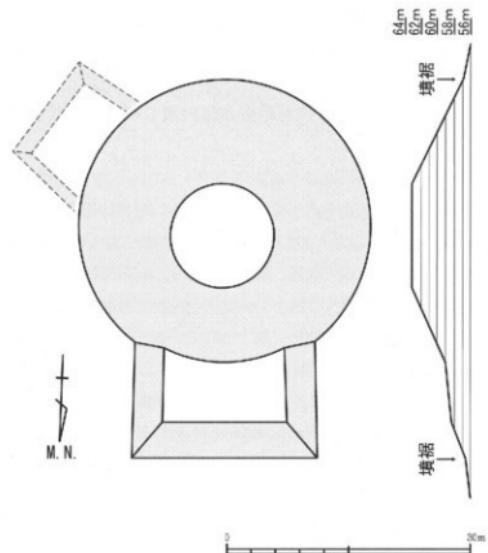


第10図 A15号墳測量図（縮尺1/200、皆川製図）

第5章 A1号墳の墳丘形態の復元

1 墳丘形態の復元

今回の調査によって後円部南側では標高56.750mの等高線上に、後円部南西側では57.000～57.250mの等高線の間に円弧を描くように墳裾が位置することを確認した。後円部北側では墳裾は円形には巡らず、大きく北側に張り出しており、前方部が存在することを示している。前方部の墳裾は西側で57.000mの等高線付近、北側で56.500～56.750mの等高線の間に位置する。よって後円部から前方部の墳裾は56.500～57.250mの等高線の間を巡るものと把握できる。これらの墳裾を基に、後円部の墳裾が描く円弧から後円部の中心点を求め、後円部径を復元した。この中心点から前方部北辺に対し垂直に引いた線を、古墳の主軸として設定した。墳丘東側の崩落している部分では、設定した主軸を中心として



第11図 稲積オオヤチ A1号墳墳丘復元模式図（縮尺1/600）

墳丘西側の墳裾を反転し復元を行った。以上の作業によって作成した復元模式図が第11図である。

墳丘の高さは後円部で6.9m、前方部で1.8mを測る。前方部に比べて大幅に高い後円部を持つ。墳丘裾が前述したように前方部と後円部で高さを揃えている事から、墳丘は全体に水平を意識して構築されたと考えられる。ただし、西側くびれ部の墳裾は、周辺より0.5～0.75m程高い位置にある。よって、この部分については後世の崩落の可能性も考えられる。また、今回の調査では墳丘に段築の痕跡は認められなかった。

なお、後円部南側の墳裾の標高である56.750mの等高線を東側に辿っていくと、南東側で大きく張り出していることがわかる。これは長さ6.5m、幅11.0mの平坦面として認めることができた。この平坦面を造出と考えると、造出側面の墳裾は南西側で55.500～56.500m、北東側では55.750～56.750mの等高線の間にそれぞれ位置するものと考えられる。

稲積オオヤチ A1号墳の墳丘の特徴としては前方部長が後円部径に対して短く、前方部高も低いことからいわゆる帆立貝形前方後円墳として捉えられる^{1,2}。帆立貝形前方後円墳は古墳時代中期の前方後円墳の構造規制に伴って各地域で建築されたと考えられており、前方後円墳集成編年（広瀬1991）³における

1 この形態の古墳の呼称は他にも帆立貝形古墳・帆立貝式古墳・造出付円墳などがあるが、本稿では帆立貝形前方後円墳と呼ぶことにとする。

2 本稿では帆立貝形前方後円墳とは前方部の長さが後円部直径の3分の1以下のものをさす。

3 以下では集成編年と表記する。

5期頃から出現し、おむね8期まで見られる。典型的な帆立貝形前方後円墳といわれている奈良県北葛城郡河合町の乙女山古墳（第12-1図）や奈良県北葛城郡広陵町の池上古墳（第12-2図）などに比べて、稲積オオヤチA1号墳は前方部の比率が大きいように捉えられる。これが何に起因するものか、北陸における帆立貝形古墳との比較を通して考えてみたい。

以下で述べる古墳についても測量図や復元図を基に復元模式図を作成し、稲積オオヤチA1号墳との比較に使用した。⁴

2 北陸における帆立貝形前方後円墳の類例との比較

(1) 能登

小田中親王塚古墳（第12-4図）

石川県鹿島郡中能登町小田中に所在する。規模は径約64m・高さ約14mを測る。谷内尾氏による復元案（谷内尾1981）では長さ約8.5m・幅約29mの前方部がつき、全長約72mの帆立貝形前方後円墳とされている。墳丘は二段築成で周溝、葺石を備える。石室用材と考えられる板石が散乱していることから、埋葬施設は竪穴式石室と考えられている。出土品は三角縁神獸鏡2・鍛形石1・管玉1がある。出土遺物等から古墳の築造時期は集成編年3期とされている。

滝大塚古墳（第12-5図）

石川県羽咋市滝に所在する。規模は全長約90m・後円部径約78m・前方部長約12m・前方部幅約38mを測る。墳丘には周溝・葺石・埴輪（川西編年Ⅲ期）を備える。墳丘が削平されているため後円部高・前方部高・段築の有無は不明であるが、その規模と外部施設の内容から段築を有したものと思われる。出土した埴輪の時期から古墳の築造時期は集成編年5期とされている。

水白鍋山古墳（第12-6図）

石川県鹿島郡中能登町水白に所在する。規模は全長約63m・後円部径約50m・後円部高約10m・前方部長約13m・前方部幅約38mを測る。前方部高は前方部が削平されているため不明であるが、測量図からは低平な前方部であったと考えられる。墳丘は二段築成で葺石・周溝・埴輪（川西編年Ⅲ期）を備える。埴輪の時期から古墳の築造時期は集成編年5期と考えられている。

小竹ガラボ山古墳（第12-7図）

石川県鹿島郡中能登町小竹に所在する。規模は全長約45m・後円部径約32.5m・後円部高約5.2m・前方部長約12.5m・前方部幅約25.5m・前方部高約1.2m・後円部と前方部との比高差約4mを測る。墳丘は二段築成で周溝・埴輪（川西編年IV期）を有する。くびれ部両側に造出が存在する可能性が高い。前方部前端から2つ、墳丘斜面から1つ須恵器甕（田辺編年TK216型式）が出土している。出土した須恵器甕や埴輪から、古墳の築造時期は集成編年7期とされている。

(2) 越前

免鳥長山古墳（第12-8図）

福井県福井市免鳥町に所在する。規模は全長約90.5m・後円部径約81.5m・後円部高約14m・前方部長約9m・前方部幅約24m・前方部高約3.9m・後円部と前方部との比高差約8mを測る。墳丘は二段築成で葺石・埴輪（川西編年Ⅲ期）を備える。墳頂部盗掘坑からは舟形石棺の破片が出土し、あわせて環頭形

4 滝大塚古墳・泰遠寺山古墳の墳丘及び小田中親王塚の前方部は削平されているため、筆者が確定復元を行い、その部分は破線で表現した。

石製品2・鏡形石2・車輪石2・鐵形石製品7以上・勾玉3・管玉2・瓊玉1・鐵器片も出土している。舟形石棺や埴輪、出土遺物などから古墳の築造時期は集成編年5期と考えられている。

泰遠寺山古墳（第12-9図）

福井県吉田郡永平寺町松岡に所在する。規模は全長約62m・後円部径約54m・前方部長8m・前方部幅25m前後を測る。墳丘には周溝・葺石・埴輪（川西編年IV期）を備える。墳丘が削平されているため後円部高・前方部高・段築の有無は不明である。古くに舟形石棺が出土し、半円方形帶神獸鏡1・内行花文鏡1・勾玉5・管玉8・瓊玉2・丸玉11・小玉448が伝世している。舟形石棺や埴輪などから古墳の築造時期は集成編年6期とされている。

鳥越山古墳（第12-10図）

福井県吉田郡永平寺町松岡に所在する。規模は全長約53.7m・後円部径約41.1m・後円部高約6.6～7.9m・前方部長約12.6m・前方部幅約24m・前方部高約1.9～6.3m・後円部と前方部との比高差約0.26mを測る。前方部高は平野側では5m以上だが、反対の山側では約2mと差が見られる。墳丘には段築・葺石は見られない。埴輪（川西編年IV期）は墳頂にのみ確認されている。また第二主体部に付属するものとして田辺編年ON46型式の須恵器が出土している。出土した須恵器や埴輪から古墳の築造時期は集成編年6～7期と考えられている。

なお、越後・加賀・若狭には帆立貝形前方後円墳は見られなかった。敦賀（越前）の立洞2号墳は帆立貝形前方後円墳とされるが、全長24mと規模が小型であるため、今回の比較からは除いた。そのほか、越前には数基の帆立貝形前方後円墳が知られるが、未調査のものや小規模なものであり、これらについても除外した。越中の桜谷2号墳については、墳丘の削平が著しく前方部を復元できないため、比較を行わなかった。

（3）墳丘比率の比較

墳丘比率の見方はまず後円部を6分割し、その6分の1を1単位として扱う。この1単位に対する前方部長・前方部幅の比率を見ていくものとする。

まずは能登の帆立貝形前方後円墳の類例から見ていくこととする。能登の類例では小田中親王塚古墳→滝大塚古墳・水白鍋山古墳→小竹ガラボ山古墳の順に築造されている。この順に前方部の比率（B-C:a-b）を並べてみると、(0.7:2.6) → (0.9:2.9) + (1.5:4.5) → (2.2:4.7)となり、前方部比率が増加する傾向が見られた。

次は越前の帆立貝形前方後円墳の類例について見ていく。越前の類例の流れは免鳥長山古墳→泰遠寺山古墳→鳥越山古墳の順に並べられている。これも築造順に前方部の比率を並べてみると、(0.7:1.8) → (0.9:2.8) → (1.8:3.5)となり、ここでも前方部比率の増加が見られた。

築造時期順で前方部の比率（B-C:a-b）を並べてみると、古墳の時期が降るにしたがって後円部に対する前方部の比率が大きくなっていることがわかる。また、地域・規模が異なるが、築造時期が共に集成編年5期である滝大塚古墳と乙女山古墳の墳丘比率がほぼ同一の比率を示したことも古墳の築造時期によって前方部の規模が変化することを示しているものと考えられる。これらの各地域における帆立貝形前方後円墳の類例比較から、造営時期によって前方部比率は変化すると考えられる。その変化は古墳の築造時期が降るにつれて前方部の規模が拡大するというものである。また、それは前方部幅にくらべ前方部長のほうが、より顕著に現れるようである。

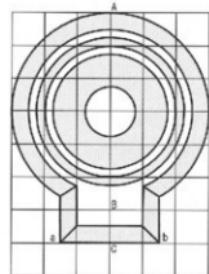
これらのことから、前方部比率が時期を表すと仮定することができるならば、稻積オオヤチA1号墳の

前方部の比率（1.8：3.8）から考えて、水白鍋山古墳（1.5：4.7）と小竹ガラボ山古墳（2.2：4.7）の間に位置付けることができるだろう。

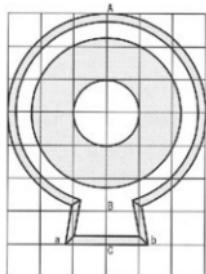
（高橋彰則）

参考文献

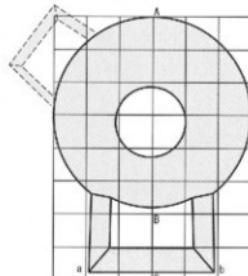
- 石部正志・田中英夫・宮川 徹・堀田啓一1980「帆立貝形古墳の築造企画」『考古学研究』第27巻第2号、考古学研究会
- 小野山節1970「五世紀における古墳の規制」『考古学研究』第16巻第3号、考古学研究会
- 鹿島町教育委員会1985『小竹ガラボ山古墳・小竹平遺跡』
- 河合町教育委員会1988「史跡乙女山古墳 付高山2号墳—遺跡調査範囲報告—」
- 川西宏幸1978「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』第64巻第2号、日本考古学会
- 近藤義郎編1992『前方後円墳集成』中部編、山川出版社
- 田辺昭三1981『須恵器大成』角川書店
- 畠田和気夫1997「能登における大型古墳の変遷と地域性」『発掘された北陸の古墳報告会資料』まつおか古代フェスティバル実行委員会
- 富山大学人文学部考古学研究室2006『平成17年度富山大学人文学部公開研究会資料 北陸の古墳編年の再検討』
- 坂 靖1992「広陵町池上古墳発掘調査概報」『奈良県遺跡調査概報 1991年度（第2分冊）』奈良県査原考古学研究所
- 沼澤 豊2006『前方後円墳と帆立貝古墳』雄山閣
- 広瀬和雄1992「前方後円墳の畿内編年」『前方後円墳集成』近畿編、山川出版社
- 水見市史編さん委員会2002『水見市史』7資料編5考古、水見市
- 福井県教育庁埋蔵文化財センター2003『第18回福井県発掘調査報告会資料』
- 福井県教育庁埋蔵文化財センター2004『第19回福井県発掘調査報告会資料』
- 谷内尾吉司1981「古墳文化」『鹿島町史（続資料編上）』石川県鹿島町
- 谷内尾吉司2002「能登半島における古墳の変遷と築造背景—小竹ガラボ山古墳の再検討から—」『石川県考古学研究会々誌』第45号、石川考古学研究会
- 遊佐和敏1988『帆立貝式古墳』同成社
- 松岡町教育委員会1984『泰遠寺山古墳』
- 松岡町教育委員会1999『泰遠寺山古墳』II
- 松岡町教育委員会・永平寺町教育委員会2005『石舟山古墳・鳥越山古墳・二本松山古墳』
- 和田晴吾2004「古墳文化論」『日本史講座』1、東京大学出版会



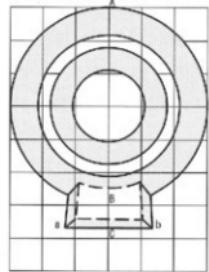
1 乙女山古墳



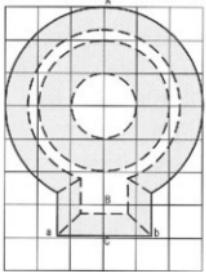
2 池上古墳



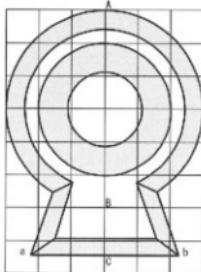
3 稲積才オヤチA1号墳



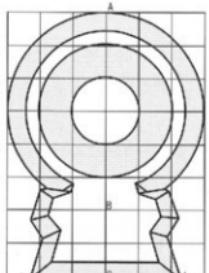
4 小田中親王塚古墳



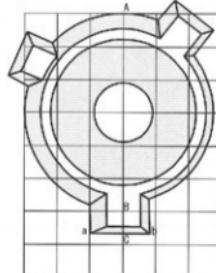
5 滝大塚古墳



6 水白鍋山古墳



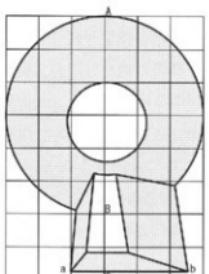
7 小竹ガラボ山古墳



8 免鳥長山古墳

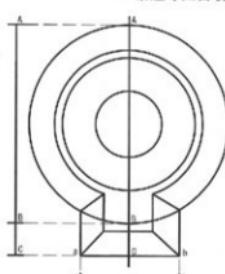


9 泰遠寺山古墳



10 鳥越山古墳

墳丘比率一覧				
古墳名	全長	A-B	B-C	a-b
乙女山古墳	130m	6	1	3
池上古墳	92m	6	1	2.5
稻積才オヤチA1号墳	46.5m	6	1.8	3.8
小田中親王塚古墳	75m	6	0.7	2.6
滝大塚古墳	90m	6	0.9	2.9
水白鍋山古墳	63m	6	1.5	4.5
小竹ガラボ山古墳	45m	6	2.2	4.7
免鳥長山古墳	90.5m	6	0.7	1.8
泰遠寺山古墳	62m	6	0.9	2.8
鳥越山古墳	53.7m	6	1.8	3.5



第12図 墳丘模式図による墳丘比率比較

第6章 まとめ

これまでの記述をもとに、第1次調査の成果は、以下の諸点にまとめることができる。

1. A支群は、南へ派生する小尾根上にA2a号墳およびA2b号墳、A3号墳、A4号墳、A13からA15号墳、A12号墳およびA5からA8号墳（今回未測量）、南東へ派生する小尾根上にA9からA11号墳（今回未測量）が築かれ、これらの尾根が接する丘陵頂部の地点に主墳のA1号墳が築造される。A1号墳墳頂部ともっとも低位にあるA8号墳墳頂部との標高差は現状で約24.7mを測る。

2. 現状では樹木に覆われているが、いずれの古墳からも富山湾を一望することが可能である。

3. A1号墳は、前方部を北へむけた墳長約46.5mの帆立貝形前方後円墳である。後円部は径約36.0m、高さ約6.9m、前方部は長さ約10.5m、幅約23.0m、高さ約1.8m、後円部と前方部の比高差は約5.1mを測る。従来の測量結果と比べて、規模は約1.0m小さくなり、各部位の計測値にも若干の差がある。また、古墳の南東側には長さ約6.5m、幅約11.0mの平坦面が存在し、これについては造出などの可能性を考えられる。

4. A2号墳については、前方後円墳の可能性が從来考えられていたが、約10.8×8.0m、高さ約1.4mのA2a号墳と、約11.0×7.0m、高さ約1.0mのA2b号墳の、いずれも長方形を呈する2基の方墳と現段階では判断するに至った。A2a号墳の北面には、約7.5×6.5mの平坦面が認められる。

5. A13号墳とA14号墳は、今回あらたに認識した古墳である。前者は約8.5×5.5m、高さ約1.1m、後者は約11.5m×約7.0m、高さ約1.5mを測る、いずれも長方形を呈する方墳と推定される。ただし、現況は隅丸長方形状の平坦面や長椿円形状の高まりとなり、いずれも墳裾が明確ではない。

6. A3号墳は、約15.0×10.0m、高さ約1.1mの長方形を呈する方墳である。A14号墳と接する北側とA5号墳と接する南側には、尾根を横断するように、いずれも上面幅約2.5mの区画溝が認められる。区画溝の中央部は陸橋状に掘り残されている。

7. A4号墳は、約17.5×15.0m、高さ約2.0mを測る方墳である。墳丘の東側から南側にかけては等高線が弧をなし、また西側は崖による崩落で墳裾の大部分が失われている。しかし、北側部分の墳裾は直線的で、また墳頂平坦面も約6.0×6.0mと比較的広い方形をなすことから、方墳と判断される。

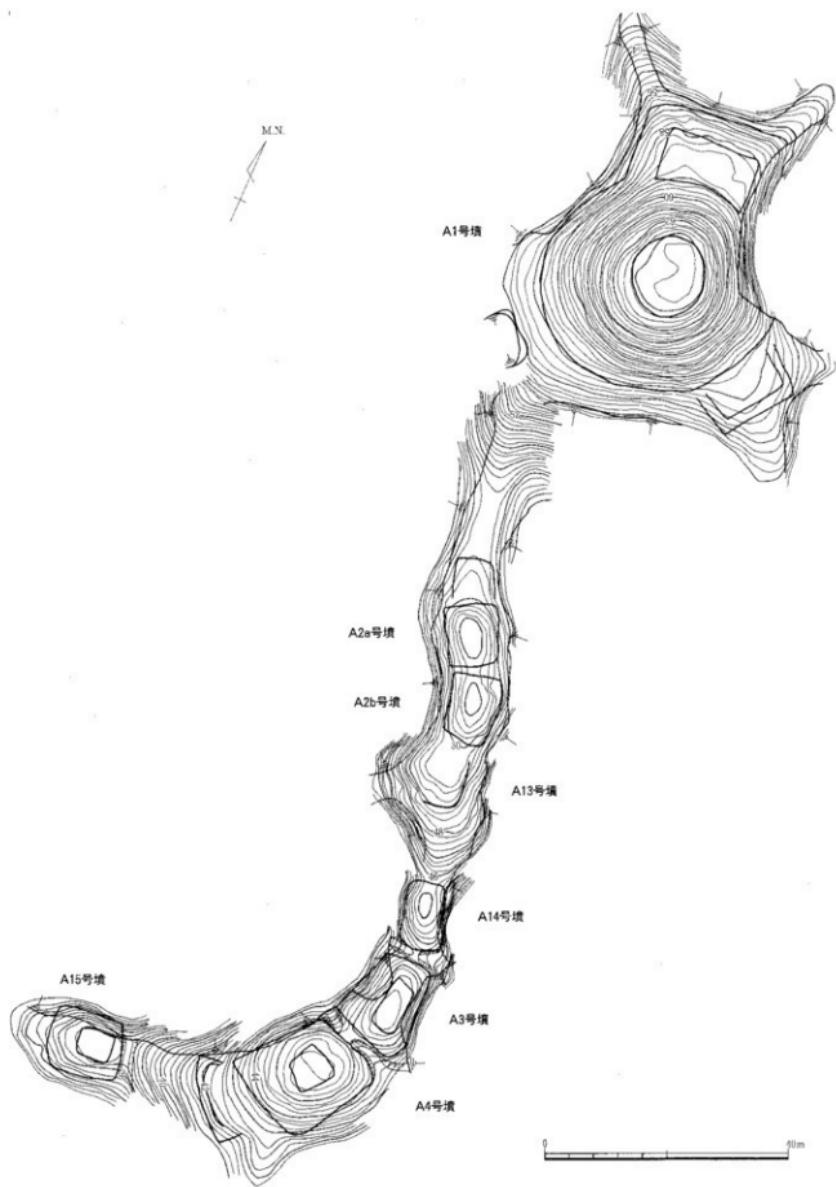
8. A15号墳は、今回あらたに発見した長方形を呈する方墳である。規模は、約12.0×10.5m、高さ約0.4～1.5mを測る。墳丘の東側には、上面幅約2.5mの区画溝が存在する。西側墳裾部分の等高線が尾根の下方へ伸びているが、前方後方形とする判断するには至らなかった。

9. いずれの古墳からも段築や葺石は確認されていない。また、埴輪や土器なども採集されていない。

以上のように、稲積オヤチ古墳群A支群の南尾根上半部には、最高所に中規模の帆立貝形前方後円墳が存在し、そして尾根の下方に小規模な方墳などが多数存在するということが明らかになった。

方墳については、長辺を尾根方向におく長方形の平面形態をもち、尾根筋上に並んで築かれる。墳丘の高さはいずれも2.0m以下であり、横穴式石室のような構造の埋葬施設は存在しないと考えられる。また、A3号墳の北辺と南辺、A15号墳の東辺には区画溝が存在する。これらの特徴は一般的に弥生時代の台状墓、あるいは弥生時代の遺制を残す古墳時代前期段階までの古墳に認められるものと言え、今後は後期の群集墳である可能性も含めてさらに検討する必要がある。

帆立貝形前方後円墳については、正円形に近い後円部と幅広の前方部という形態をもつ。後円部頂および前方部頂には比較的広い平坦面が認められる。古墳前期段階のいわゆる「纏向型前方後円墳」と呼ばれ



第13図 稲積オヤチ古墳群第1次調査古墳測量図（縮尺1/800、松岡製図）

るような低平坦な前方部をもつ古墳とは異なるものである。また、古墳南東側には比較的広い平坦面が存在する。帆立貝形前方後円墳に造出が付設される例は、北陸では古墳中期初頭段階の福井市免島長山古墳に認められており、本墳の場合もその可能性が考えられる。これについては今後の検討課題である。

築造時期については、水見市から石動山を越えた能登の邑知地溝帶（七尾市から羽咋市にかけての地域）に、帆立貝形前方後円墳の中能登町水白鍋山古墳や同町小竹ガラボ山古墳、羽咋市滝大塚古墳が近在し、これらと同じ古墳中期に属することが推測される。仮にこの考えが成り立つならば、稲積オオヤチA1号墳は、立山町稚児塚古墳（直径46.2mの円墳）と並んで県内最大の中古墳ということになるであろう。

古墳の築かれた尾根は崖による崩落が激しく、また山道などが通る。さらに、隣接する丘陵上には中世の稲積城や阿尾城などがあり、山城などによる墳丘改変の可能性が考慮されるところである。とくに、今回の調査であたらしく認識したA2a号墳、A2b号墳、A13号墳、A14号墳についてはさらなる検証が必要で、A15号墳をも含めて、今後名称に変更が生じる可能性がある。

尾根の下半部には、まだ前方後方墳をはじめとする数基の古墳が存在しており、それらを含めて古墳総数の把握や、墳形および規模の解明、そして古墳群の造営時期の評価を総合的に行っていきたい。

（高橋浩二）

参考文献

- 水見市史編さん委員会 1999 『水見市史』 9資料編7自然環境、水見市
水見市史編さん委員会 2002 『水見市史』 7資料編5考古、水見市
岸本雅敏 1992 「第2章 越中」『前方後円墳集成』中部編、山川出版社
高橋浩二・黒崎直 2004 「水見市阿尾島田A1号墳の調査と能越地方の古墳」『日本考古学協会第70回総会研究発表要旨』
富山大学考古学研究室 2002 『阿尾島田A1号墳－第1次・第2次発掘調査報告書－』
富山大学考古学研究室 2003 『阿尾島田A1号墳－第3次発掘調査報告書－』
富山大学考古学研究室 2005 『阿尾島田A2号墳－第1次発掘調査報告書－』
富山大学考古学研究室 2006 『阿尾島田A2号墳－第2次発掘調査報告書－』
藤田富士夫 1983 『日本の古代遺跡』13富山、保育社

図 版



1 A1号墳後内部南東側墳櫛および造出部（西から）



2 A1号墳前方部および後内部北側（北から）



3 A1号墳後円部南西側墳裾（南西から）



4 A1号墳後円部北側傾斜変換点（南東から）



5 A1号墳前方部墳裾（南西から）



6 A1号墳後円部北側墳裾（北西から）



7 A1号墳墳頂部（北西から）



8 A2a号墳（手前）からA1号墳にかけて（南から）

3



9 A2a号墳墳丘とテラス部（北から）



10 A2a号墳全景（南東から）



11 A2a号墳（手前）からA2b号墳にかけて（北西から）



12 A2b号墳全景（南から）



13 A13号墳全景（北から）



14 A13号墳平坦面（南から）



15 A14号墳全景（北から）



16 A3号墳（手前）からA14号墳にかけて（南から）



17 A3号墳全景（北から）



18 A3号墳全景（南から）



19 A3・A4号墳間の溝（西から）



20 A3号墳南側の溝（西から）



21 A4号墳全景（北から）



22 A4号墳全景（南西から）



23 A4号墳墳體（南東から）



24 A15号墳全景（東から）



25 A15号墳全景（南東から）



26 A15号墳東側の溝（南東から）

ふりがな	いなづみおおやちこふんぐん				
書名	稲積オオヤチ古墳群				
副書名	第1次調査報告書				
巻次					
シリーズ名					
シリーズ番号					
編著者名	高橋浩二				
編集機関	富山大学人文学部考古学研究室				
所在地	〒930-8555 富山県富山市五福3190 TEL 076(445)6195				
発行年月日	2007年3月31日				
所取遺跡名	所在地	北緯 ○・'・"	東緯 ○・'・"	調査期間	調査面積(m ²)
稲積オオヤチ古墳群	水見市稲積	36度 52分 51秒	136度 58分 39秒	20060818 ～20060825	
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
稲積オオヤチ古墳群	古墳	古墳	帆立貝形前方後円墳1基、方墳7基	なし	稲積オオヤチ古墳群の測量を実施した。調査の結果、A1号墳は墳長46.5mの帆立貝形前方後円墳と判断された。墳形などから古墳は中期のものと推定され、中期では富山県最大の規模となる。また、小型の方墳が7基ほど確認されたが、墳裾が比較的明確なA3号墳とA4号墳、そしてA15号墳以外については、墳形や規模などのさらなる検討が必要である。

2007年3月 日印刷

2007年3月31日発行

稲積オオヤチ古墳群

—第1次調査報告書—

編集・発行 富山大学人文学部考古学研究室

〒930-8555 富山県富山市五福3190

TEL 076-445-6195

印 刷 あけぼの企画株式会社